目白大学　文学・言語学研究
第3号　2007年1月　1－11

動詞「おおう」と格助詞

山　西　正　子

キーワード：「おおう」　格助詞　自動詞　他動詞

要旨：本稿は、通行の辞書では「他動詞」とされる動詞「おおう」について、史的考察をも加えた上で、①②の2点を確認し、③④を史的変遷に関する推論として提示する。

① 「さす」「つのる」「むす」「もつ」「よせる」などと同様、自／他両用が記録上でも確認できる。「おおいかぶさる／おおいかぶせる」の意がともにある。

② 明治以降は、他動詞としての用法が主流で、通行の辞書の記述はその点で当然の帰結である。共起する格助詞も、明治以降は「～で～をおおう」で安定している。

③ 「おほふ」は、多くの動詞が接尾辞その他により自／他の区別をする中で、それにならわず自／他同形のまま使用され続けた。ただし格助詞「を」と共起する使用状況が意識された結果、「他動詞」とされ、「自動詞」の使用法が激減した。

④ 「おほふ」は、自／他両用であった点では「ひらく」と類似する。そして一般的には他動詞、かつ、ときに自動詞にもなり得る点で「かえす／むす」などと共通点がある。また、「もつ」が自動詞「保つ」と他動詞「持つ」のように、漢字について厳密な区別を得たのに対し、「おおう」は「漢字による保証」が得られなかった。その点で「おおう」は「不運」ともいえる存在である。

内容　0　問題のありか
1　「おおう」の現状
2　用例の確認
3　日本語の自／他の対応

0　問題のありか

百人一首のうちの「おほけなく憂き世の民に おほふ哉わが立つ杣の墨染の袖」（慈円・『千載集』所収）の「おほふ」を、機械的に「おおう」としてよいのか、いささかの違和感がある。この点に着目し、通行の口語訳のうちの4種を「おほふ」を中心に見ていく。

訳A　世の人々の上に、世の幸せを仏に願っておいかけることであるよ。…略…この墨染めの衣の袖を。（平田澄子・新川雅朋2005『小倉百人一首――みやびとあそび――』新典社）

訳B　憂き世の民の上に墨染めの衣を覆いかけることだ。（片野達郎・松野陽一1993『千載和歌集』

やまにしまさこ：外国語学部アジア語学科教授

（当該部分は執筆松野・新日本古典文学大系・岩波書店）

訳C　僧としてつらいこの世の人々に　覆いかけることだ。比叡の山に住みはじめた私の墨染めの袖を。（谷山　茂ほか1992『新修国語総覧』京都書房）

訳D　この世の人々の上に（墨染の衣を）覆うよ、即ち、世間の人々の上に、仏のご加護のあるように祈念するよ、の意。（三木幸信・中川浩文1982『評解百人一首』<新修版>京都書房）

いずれの口語訳にも格助詞「に」が使用されている。稿者にとっては、「おおう」と共起する格助詞「に」は、受身の動作主を示すものである（「雪におおわれた山頂／ベールにおおわれた横顔」）。また「～におおいかける」とすれば「おおう」動作の到達点ということで理解できるが、問題なしとも言い切れない。

「おおう」と格助詞との共起関係を点検し、「おおう」の輪郭を捉えておきたい。

1　「おおう」の現状

11　「おおう」と「かくす」

上記0の訳Dでは「人々の上に　墨染の衣を　覆う」、訳A、訳B、訳Cは「人々（の上）に墨染めの衣を　覆いかける」となっている（以下、上記 4種に倣い「おおう」は「覆う」、「かくす」は「隠す」で代表させることがある）。

稿者の語感では訳A、訳B、訳Cの「～に　～を　覆いかける」がどちらかといえば自然で、訳Dの「～に　～を　覆う」は違和感がある。すなわち、「入院患者に　毛布を　覆いかける」は許容できなくはないが、「？入院患者に　毛布を　覆う」は言いにくい。

あえて言うなら、「傷口をガーゼで覆う／顔を両手で覆う」のであり、「～（あるヒト／モノ）を～（あるモノ）で　覆う」のかたちになる。稿者の語感では、「覆う」は格関係において「隠す」と同じ「ふるまい」をする。

むろん、「覆う」と「隠す」は同義ではない。対象物を移動させて「隠す」ことは可能（クリスマスプレゼントを靴下の中に隠す）だが、「覆う」は対象を動かさすことのない行為であり、かつそのための材料をつねに必要とする。また差異は心理面にもある。「傷口をガーゼで大きく覆う／隠す」はともに自然であるが、単なる治療行為を越えて、他者の視線を強く意識するときは「隠す」が使用されることもあろう。

「覆う」「隠す」とも、格助詞「で」と「を」と共起する。「覆う／隠す」対象は「モノ／コト／身体の一部」であり、「覆う」手段となる材料――以下「手段／材料」――は「モノ／コト」である。したがって複合動詞「覆い隠す」は、安定感がある。上述の「傷口をガーゼで覆う／隠す」「顔を両手で覆う／隠す」のほか、「襟元をスカーフで」「悲しみを笑顔で」「真実をウソで」などが、場面に応じて、「覆う」「隠す」のいずれもと、さらには「覆い隠す」と共起が可能である。

12　「覆う」と「かける」

上記訳A、訳B、訳Cの「覆いかける」について、稿者がもついささかの違和感は、格助詞との共起

関係に起因するのであろう。事実として、「掛ける」は格助詞「に」と共起するが、「～（ヒト／モノ）に　～（モノ）を　掛ける」となる。「入院患者に毛布を掛ける／食卓にテーブルクロスを掛ける」が自然である。

格助詞との共起関係からいえば、「覆う」周辺の動詞については2パタンがある。

パタンA　対象を　手段／材料で　覆う／隠す／包む

パタンB　対象に　手段／材料を　掛ける／かぶせる

パタンAの「覆う」と、パタンBの「掛ける」が複合動詞「覆いかける」を形成するとき、そこにいささかの違和感が生じるのも、それなりの理由なしとはいえない。

13　「おおう」の用例

11で示した、「～（あるヒト／モノ）を　～（あるモノ）で　覆う」の格関係が自然であるとする稿者の感覚は、次の実例からも順当視される。

（1）決定的なチャンスを逃し、両手で顔を 覆う柳沢

（写真説明文・2006・6・19朝日新聞夕刊1面）

（2）石井茂(83)は、東京・神宮外苑で学徒出陣の壮行会の行進の中にいた。雨が入らないよう銃口を手ぬぐいで 覆った。

（署名記事早野・大室「ニッポン人脈記」2006・8・17朝日新聞夕刊1面）

（3）それぞれの寝椅子で、疲れ切った男たちがそれぞれの格好で眠っている。眼鏡を額の上に置いたまま眠っている者。小さな毛布で器用に身体のすべてを 覆っている者。そして…略…

（吉田修一『悪人』121回　2006・8・17朝日新聞夕刊3面）

14　辞書の記述その1——他動詞説の確認

稿者の調査した範囲で、通行の辞書は「おおう」について、おおむね、①自／他の区別をする場合は「他動詞」、②例文に含まれる格助詞は「～が　～で　～を　おおう」形式から逸脱しない、③受身文の動作主は「に／で」で示す、との3点で一致する。

以下、調査した辞書名と自／他の区別、および例の一部を示す。『日本国語大辞典第二版』（2000小学館）については15でとり上げる。

a　『新明解国語辞典』（第六版2005三省堂）　　b　『旺文社国語辞典』（第九版2002）

c　『角川必携国語辞典』（五版2002）…自／他の区別なし

d　『岩波国語辞典』（第六版2000）　　e　『明鏡国語辞典』（2002大修館書店）

f　『新編大言海』（2001冨山房）　　g　『集英社国語辞典』（第二版2000）

h　『大辞泉』（増補・新訂版1998小学館）…自／他の区別なし

i　『広辞苑』（第五版1998岩波書店）　　j　『日本語大辞典』（第二版1995講談社）

k　『大辞林』（第十一刷1989三省堂）…自／他の区別なし

a　苗床をビニールで－／トタンで屋根を－／ハンカチで顔を－／秘密のベールに－われる。

b　目を－／雨雲が空を－

c　山が雪で－われる

d　苗床をビニールで－／手でろうそくを－・って風を防ぐ

e　食卓を白い布で－／手で顔を－・て泣く／雲が空を－／辺り一面が霧に－われる

f　罪を蔽ふ

g　テーブルを白い布で－／苗床をビニールで－／手で顔を－

h　雲が山の頂を－／ベールで顔を－

i　衣を脱ぎて虎に－ひて虎を隠す（今昔九）／窓をカーテンで－

j　本をカバーで－

k　車をシートで－／厚い雲が空一面を－

上記0の訳Dの、「墨染めの衣を人々の上に」のような「材料を　物に　おおう」のかたちは、現代語に関しては、辞書に依拠する限り、「正用」であるとの「確信」が得にくい。iの「衣を脱ぎて虎に－ひて虎を隠す」は『今昔物語』の例であり、仮にこれに気づいたとしても「現代語ではない」と排斥される可能性もある。

15　辞書の記述その2――自動詞性の指摘

これらに対して、『日本国語大辞典第二版』（2000小学館）の記述は興味深い。いま、一部を要約すると以下のごとくである。

①　「おおう」は、ワ行五段活用（古語ではハ行四段）の他動詞。

②　語義のひとつに「全体に広がりかぶさってつつむ」がある。

③　その例として以下のものがある。

イ）大唐西域記巻十二平安中期点（950頃）「積りし雪谷に弥（オホヘ）り」

ロ）枕草子（10C終一五一・うつくしきもの「頭はあまそぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで」

ハ）玉葉（1312）雑一・一八八二「咲く花におほふ霞の袖なれど風をばえこそ隔てざりけり＜藤原泰基＞」

④　上記②③に関しては、自然発生的な作用に用い、多く「物におおう」の表現で自動詞的である。

⑤　「～を　～で　おおう」形式については、古くは「材料を（もって）物におおう」の表現が多いが、現在では、「材料で物をおおう」が普通。だだし、材料に働きかける意識が強いと、「材料を物に」の表現も使われる。

としている。基本的には他動詞としつつ、自動詞の側面をも指摘している。

2　用例の確認

21　古典語の「おほふ」

古典語において「おほふ」は用例確認が容易な語とはいえない。国文学資料館のデータベース

（底本は「日本古典文学大系」岩波書店）でも、例えば『源氏物語』の「おほふ」は全活用形を合わせて以下の(4)～(10)の７例と動作性名詞「くちおほひ」１例、「カバー」にあたる名詞「おほひ」４例である。

（４）（空蝉は）たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、目をし、つとつけたれば、おのづから、そばめに見ゆ。（空蝉　一巻 112ペ）

（５）ひとりしてなづるは袖の程なきにおほふばかりの蔭をしぞ待つ
（ひとり幼い姫君を守り、源氏の庇護を願う、明石の上の歌・澪標　二巻 110ペ）

（６）「その駒」など、みだれ遊びて、ぬぎかけ給ふ色々、「秋の錦を、風の吹きおほふか」と見ゆ。（松風　二巻 210ペ）

（７）くさむらの露の玉の緒、みだるゝまに、御心惑ひもしぬべく、おぼしたり。おほふばかりの袖は、秋の空にしもこそ、ほしげなりけれ。（野分　三巻 46ペ）

（８）「おほふばかりの袖、求めけん人よりは、いとかしこう、思し寄り給へりかし」など、この宮ばかりをぞ、もてあそびに、見たてまつり給ふ。（幻　四巻 201ペ）

（９）九月になりて、九日、綿おほひたる菊を御覧じて、…略…（幻　四巻 212ペ）

（10）左のなれき「さくら花匂ひあまたに散らさじとおほふばかりの袖はありやは　心せばげにこそ、見ゆめれ」など、言ひおとす。（竹河　四巻 269ペ）

このうち、(7)(8)(10)はいずれも『後撰和歌集』の「大空におほふばかりの袖もがな春さく花を風にまかせじ」（春中・読人不知）に依拠している。

ここでは(5)(7)(8)(10)の「何かを隠すように広がりかかる」の意の自動詞と解釈可能な例、(9)の「何かの上にかぶせる」意の他動詞の例、さらには(4)(6)のようにこれらの結果生じた「何かを隠す」の意の他動詞の例が確認できる。すなわち　３種の用法があることになる。

22　江戸時代文語文の「おほふ」

同様のことは、江戸時代の『椿説弓張月』（1811曲亭馬琴）でも確認できる。この文献では漢字「掩／覆／蔽」が使用される。地の文と会話文を区別せずに引用する。

（11）征雲冉冉（ぜんぜん）として空山（くうざん）を蔽ふ。（上巻　65ペ）

（12）四方晦曚として、一朶の黒雲須藤が上に掩ひ累り、一声の霹靂、天地も動くばかりに鳴落つるを、（上巻　97ペ）

（13）頭の毛は雪のごとく白くて、長二三尺もあるべく、脣厚くして鼻を掩ひ、口は方に裂けて尖き牙あり。（上巻 172ペ）

（14）なほ命や惜かりけん、両の袖もて面を掩ひ、苦痛をしのびて逃去（にげさり）けり。（上巻 201ペ）

（15）時に一道の黒気、玉體を掩ひ隠す程こそあれ、電晃きわたり、雲間にあやしの御姿、隠々として見えさせたまへば（上巻 224ペ）

（16）やをれ忠重…略…、さるを汝が非を掩ん為に、事を両端によして、子共等が首を継しといふ。（上巻 284ペ）

(17) 譬(たとひ)ば、三の窒(たかね)に五色鮮明なる、種々の荘厳たな引き、その山を覆ひ竭(つく)すがごとし。

(上巻 462ぺ)

(18) 只この儘に土を覆ひ、舊のごとくに埋し給へ。古塚を発(あば)くは、山賊の所行なり。

(下巻　20ぺ)

(19) かゝればしばしば、毛国鼎が面を犯して諫めこしらへ、王女の為に非を覆ひしは、おのれが子なれば、いかにもして、この国をしらせんとす。その奸計一朝の事にあらねど…略…

(下巻　46ぺ)

(20) 王女を船に扶乗(たすけの)して、澳(おき)のかたを遥に指し…略…、畚(ふご)の上には網をうち掩ひて、漁猟(すなどり)せしさまにこしらへ、為朝は簑の襟をかきあはし…略…　(下巻 144ぺ)

(21) 久後ながく芭蕉布の、糸の乱れをうちおさめ、鶴の毛衣清潔く、浮世の民に掩ひつゝ、亀の齢を十あまり、あわして曾孫玄孫の、後まで栄よ」と…略…　(下巻 301ぺ)

(22) つや〳〵こゝろ得がたきは、いぬる十月、為朝夫婦が存亡定かならざる比より、その往方をしらんとて、わが千里眼を睜れども、雲霧などの掩ふやうにて、絶てこれをしるによしなし。

(下巻 373ぺ)

(23) その疾(とき)こと雷光の如く、一朶の烏雲、曚雲が頂の上に掩ひて、をり〳〵その姿を隠し、前にあるかとすれば、忽然として後にあり。　(下巻 383ぺ)

このような文語文の場合、「おほふ」は、(12)(23)の自動詞「かぶさるように広がる」と、(18)(20)(21)他動詞「かぶせるように広げる」――広げるモノを格助詞「を」で明示する――の両用が確認できる。殊に(20)「畚(ふご)の上に網をうち掩ふ」は、0で示した「～に　～を　おほふ」そのままの格助詞の使用例である。

さらにはその他動詞の結果の、「かぶせて隠す」――隠す対象を格助詞「を」で明示する、現代語の主流といえる用法――が、(11)(13)(14)(15)(16)(17)(19)である。(14)はその手段が「もて」で示される。そして(22)については「雲霧が広がっている」のか、結果として「雲霧が隠している」のか判断しがたい。

ここでも自動詞と、他動詞「かぶせるように広げる／かぶせて隠す」の3用法がある。

23　古典語「おほふ」と自／他

「おほふ」は古典語の世界では、自／他同形の動詞と考えられるのではないか。『日本国語大辞典第二版』は「自動詞的」と記述するが、「的」ではなく「自動詞」である。

自然現象の雲の場合のように、外部からは意思を確認しがたい存在が「みずからを広げている」状況であれば自動詞であり、意思をもつものが「何かを広げている」状況であれば他動詞と解釈できる。現代語でも通用する自／他同形の「ひらく」と同じである。

『日本国語大辞典第二版』の例示する（15の③のロ))。

(24) 頭はあまそぎなるちごの、目に髪のおほへるをかきはやらで、うちかたぶきて物など見たるも、うつくし。　(『枕草子』一五一段 206ぺ)

では「目に髪がかぶさっている」のである。「髪が重力のままに目のあたりにかかる」ことであり、自動詞と解釈しても支障はない。

この事実に関する考察は3以下で述べる。

24　明治以降の「おおう」

古典語における「おほふ」の実態はそれとして認めつつ、明治以降の様相も確認する。　まず、夏目漱石の用法をいくつか調査する。『作家別用語索引』（教育社刊）により、『吾輩は猫である』1905、『虞美人草』1907、『明暗』1916の用例を確認する。この範囲内では、「おおう」は「覆い隠す」の意の他動詞で、「を」が示すのはその対象である。「おおう」手段／材料を「を」で示すことはない。また「に」は受身文の動作主である。

(25)(26)は『吾輩は猫である』、(27)(28)は『虞美人草』、(29)(30)は『明暗』の例。

(25) 元来吾輩の考によると大空は万物を 覆う為め大地は万物を載せる為に出来て居る――

(26) プロータスは女子が綺羅を飾るの癖を以てその天稟の醜を 蔽うの陋策に本づくものとせり。

『吾輩は猫である』は2例とも「～をおおう」である。

(27) 両手は、雪の様なカフスに甲まで蔽われて、くすんだ鼠縞の袖の下から、七宝の夫婦釦が、きらりと顔を出している。

(28) 小窓は…略…左右から垂れかかる窓掛に半ば蔽われている。

『虞美人草』は上記2例のほかに8例の「おおう」があるが、すべて「を」と共起している。「春光は天地を蔽う」「垣を蔽う連翹」「一輪挿を蔽う椿」「腰を蔽う帯」「蜘蛛の子の様に暗い森を蔽うて至る文明の民」「耳を蔽うて肩に流す鬢の影」「野を蔽う陽炎」「仏の丘を掩うて、いそぐことを解せぬ京の日」のかたちである。

(29) 向うの高みを 蔽っている深い木立の色が、浮き出したように、くっきり見えた。

(30) 長襦袢の色が、薄い羅紗製の上靴を突掛けた素足の甲を 被っていた。

『明暗』の 2例とも「～をおおう」である。

以下、明治以降の文筆家の作品について、「おおう」には、かな表記のほか、該当する漢字が「覆」以外にもあり得る、との事実を前提に用例調査を行う。「CD－ROM版、新潮文庫の100冊」により、38名の文筆家の作品を調査した。かな表記の「おおう」とその活用形、および漢字「覆／掩／被／蓋／蔽」について検索を行い、動詞としての全338例を得た。

結果としては、用例は多いとはいえず、明快な結論には至らない。傾向だけを指摘することになる。

傾向1　自動詞「おおう」の単独例は、少なく、ここでは(31)のみである。複合の前項としてはいくつか確認できる。

(31) 外は風はなく、月も星もない空がぬり込めたようにおおっていた。

（渡辺淳一『花埋み』1970）

(32) 大いなる僧形の者、赤き衣を羽のやうに羽ばたきして、其木の梢に蔽ひかゝりたり。

（柳田国男『遠野物語』1910）

(33) 不幸の雲が蔽いかかろうとしていた。（有島武郎『生れ出づる悩み』1918）

(34) 生活の上に…略…国家の法律が重く掩いかぶさっているのだ。

（石川達三『青春の蹉跌』1968）

傾向2　15の⑤は「材料を物におおう」があるとするが、確認できたのは5例のみであった。なお他動詞「かぶせる」と複合する例はある。

(35) 硝子の器を載せた春慶塗の卓や、白いシイツを 掩うた診察用の寝台が、この柱と異様なコントラストをなしていた。（森　鷗外『カズイスチカ』1911）

(36) 明日切腹候場所は…略…、仮屋の内には畳一枚を敷き、上に白布を覆之有候由に候。

（森　鷗外『興津弥五右衛門の遺書』1912）

(37) 解剖台には、濡れた麻布が覆ってあり、その傍に教授だけが残っていた。

（大江健三郎『死者の奢り』1957）

(38) 顔の汗は右半分しか拭えない。…略…左半分は…略…覆った布の下に糊のように濃い汗か膿が溜っているのではないかと思われる。（井伏鱒二『黒い雨』1965）

(39) 患部をそっと拭き、交換用の布を 覆って絆創膏で留めた。（井伏鱒二『黒い雨』1965）

(40) 音作は俵蓋を 掩い冠せながら言った。（島崎藤村『破戒』1906）

傾向3　主流は「(～で) ～を　おおう」である。受身の「～が　～に　おおわれる」も多い。このときの「に」は、しばしば「で」ともなる。

(41) 彼女は両手で顔を 蔽いながら、ただ頷いて見せた。（堀　辰雄『風立ちぬ』1936）

(42) 袖で口を 掩っているさまがおとなっぽく美しい。（田辺聖子『新源氏物語』1979）

(43) みずみずしい緑に おおわれた大小さまざまな島々が散在しているのが見えた。

（吉村　昭『戦艦武蔵』1966）

(44) 遺骸は芭蕉の葉で おおわれ、海軍食器に汲んだ密林の中の湧き水が供えられた。

（阿川弘之『山本五十六』1965）

25　「おほふ」から「おおう」へ

21～24の検討に基づき、「おほふ／おおう」について、次のことを仮説として提示する。

仮説1　「おほふ」はふるくは自／他同形の動詞であった。

仮説2　格助詞「を」と共起することが増加し、他動詞として認識されることが多くなった。

仮説3　しかも「を」の示すものは、「覆い隠すための材料／手段」、「覆い隠す対象」の両用が存在したが、現代語としては「覆い隠す対象」への傾斜がきわめて強い。また「に」は「覆い隠す対象」から受身文の動作主へと役割を変更した。このことが通行の辞書の記述にも反映されている。

3　日本語の自／他の対応

31　自／他の区別について

日本語に自／他の区別は不要あるいは不可能とする立場もあるが、稿者はその立場をとらない。現代語では、誤解のない文章を書こうとすれば、格助詞の使用は不可欠であり、事実の把握態度は自／他の選択に反映される。「砂山が崩れた」と「砂山を崩した」の２文は、格助詞の交換はできず、事実の把握態度も異なる（作り方が稚拙だった、残念／あのいたずらっ子はどこの子だろう、困ったことだ）。

現代語は格助詞「を」と共起する「自動詞」を、移動の場所や離脱点を示す「道路を歩く／故郷を離れる」などの場合を残して、失いつつある。

鈴木英夫1988が指摘するように、「目／口を明く」や「腹を立つ」は激減し、「目／口を明ける」や「腹を立てる」になった。格助詞「を」と共起するものは他動詞との認識が強くなったのであろう。

32　自／他に関する辞書の記述

自／他の区別をしない辞書も存在する中で、『明鏡国語辞典』は、むしろ意識的に記述している。1例を示す。一般的には「に」と共起する自動詞とされる「あこがれる」について、語義と、「に」と共起する例文「田舎での生活／宇宙飛行士／若い実業家にあこがれる」を示したのち、

もと「異国情調を－」のように他動詞にも使った。

としている。このように「あこがれる」の他動詞用法に言及しているが、『日本国語大辞典第二版』および**14**で示した他の辞書のいずれも、この点への言及はない。

ただし、「異国情調を－」の出典はここでは不明。なお、稿者は学生が海外旅行経験を書いた用例（45）を確認しており、「～をあこがれる」の存在は否定できない。

(45)18歳のイラク少女が英語で話しかけてきた。日本人の小さな目を あこがれていること、富士山はどういう山であるか、…略…

（読者投稿欄・大学生20歳　2003・２・17朝刊10面）

『明鏡国語辞典』は、ほかにも、「気づく」「たえる」「まよう」についてもそれぞれ、「～に気づく」が一般的だが、「～を気づく」の形（他動詞）でも使う。

「耐え難きを耐える」のように、他動詞としても使う。

「どう判断すべきかを－・った」など、迷い悩む意で他動詞としても使う。

とし、自／他の判断に柔軟性を感じさせる。そしてここでは、一部の例外はあるが、しばしば「を」との共起が「他動詞」との判断につながっているといえる。

現実問題として、格助詞の選択について判断がつきかねることがある。若年層の文章を見ると、「がんばる」がしばしば「を」と共起し、他動詞として認識されているかの印象をもつ。また「鑑みる」について「～を鑑みる」としてある文章を添削すべきか否か判断が難しい。ここでも問題になるのは「に」と「を」の関係である。

33　「おほふ」の自／他

31を繰り返すことになるが、自動詞「～をあく／たつ」の激減は、現代日本語の中にある、「格助詞「を」と共起するのは他動詞である」との共通認識の結果ではないか。

とすれば、つとに格助詞「を」と共起する習慣を得た「おほふ」が、時代とともにそれを強化し、自動詞との認識から遠ざかっていったのではないか。

一般的に自動詞として認識される「あく／たつ」が、近年、「を」との共起を失いつつあることは、この推測を支持するものと考える。

風間喜代三ほか1993は、「典型的な自動詞」から「典型的な他動詞」の間に、「を」と共起はするがほとんど他動詞性のない動詞として「歩く」を位置づけている。

「おほふ」と共起した「を」が、「歩く」の場合と同様、通過していく場所を示す「を」だった可能性はある。

(46) 言終わらざるに、一種の冷笑は不平と相半ばして面積広き未亡人の顔を おおいぬ。

（徳冨蘆花『不如帰』1899　岩波文庫）

この「おおう」は「顔の上を広がって行く」ことである。

「おほふ」と共起した「を」は、「移動の経過地点」ではなかったか。何かが「広がって行く」ことは、その下にあるものを「隠す」ことである。自動詞「覆う」の弱体化と、「隠す」意の他動詞「覆う」の安定化には、格助詞「を」の解釈が関連するのではないか。

この観点に立てば、「おそれる」なども説明がつく。「おそれる」について、辞書の自／他の判断は一致せず、現時点では自動詞説が優勢である。しかし実際には「敵の勢いに／をおそれて」があり、「を」ともしばしば共起する。他動詞と認識される所以である。「に／を」の前接語（ここでは「敵の勢い」）は、動作主がそれを積極的に意識する対象と見なすとき、いわゆる目的語となる。そして「おそれる」は他動詞と解釈される。また、動作主が「勝手に」おびえているだけならば、前接語は単なる「原因／理由」であり、「風邪で寝込む／病いに倒れる」の「寝込む／倒れる」同様、「おそれる」は自動詞と解釈される。このように、自／他の区別からいえば境界線上の動詞が、「を」との共起により、他動詞と解釈されるようになるのであろう。

34　「おおう」の類例

「おおう」のように、一般的には他動詞でありながら、ときに自動詞でもある動詞の類例はいくつかある。

「かえす／ふさぐ／むす／よせる」などである。これらは「借りた本を返す／穴を塞ぐ／糯米を蒸す／好意を寄せる」のように「を」と共起する他動詞である。しかし「寄する波よ、かえす波よ」（「浜辺の歌」1928林　古渓）のように、「自分自身」を「寄せる／返す」という場合は「波が寄せる／返す」のかたちの自動詞である。また「自分自身の心のゆとり部分を／大気が自分自身を」それぞれ「塞ぐ／蒸す」ときは「気分が塞ぐ／湿気のために蒸している」ことになる。

すなわち、一般的には「～（ダレ）が　～（モノ・コト）を　返す／塞ぐ／蒸す／寄せる」のか

たちの他動詞だが、ときに動作主自身の中の変化を示す自動詞となる。「おほふ」も、他動詞としての認識が強化されたのちにも、自動詞でもあり得たのである。

「おほふ」は、多くの動詞が、接尾辞や活用形式の区別により、自／他の区別を獲得していった（「寄せる」は「寄る」と、「返す」は「返る」との対応がある）中で、ついに「おほふ」のまま固定した。そして格助詞「を」と共起することにより、他動詞との認識が強化された。しかし、ときには自動詞として使用されるのであろう。

多くの動詞が、自／他の区別を、形式の上あるいは漢字使用の上で獲得し、事実の把握態度や意味内容を峻別できるようになっていった時、「おほふ」は形式上の区別も漢字使用の区別もないまま、しばしば「を」と共起する他動詞としての側面のみが意識された。そして「を」が示すのは、かつては「おほふ」手段／材料でもあったのだが、現代語ではほぼ、「おおう」対象のモノやコトになっている。

35 「さす」「もつ」との対比——漢字の区別

動詞「あける／さす／もつ」は、自／他同形である。「明ける」は自動詞、「開ける／空ける」は他動詞である。「さす」には、ほぼ他動詞専用の「挿す／刺す」がある。また「もつ」に関して、須賀一好1987は、「「持つ」は、自・他の対応がない」とするが、自動詞「保つ」と他動詞「持つ」の区別がある。「もつ」は自／他同形で、「ものごとがそのまま続いている状態」をいうのではないか。動作主がそのままの状態でいるのが「保つ」であり、他のものをその状態を確保するのが「持つ」であろう。

「おおう」には、このような漢字意識がないといえる。「掩／蓋／被／覆／蔽」などがある中で、一般には「覆」ですまされる。しかも「覆」は同時に「くつがえす」でもある。あえて言うなら、「おおう」は、「不運な」動詞である。

接尾辞その他で自／他の区別を獲得することはなかった。漢字の上で厳密に区別されることもなかった。1945年以降の教育改革でようやく安定的に使用されるに至った「覆」は「くつがえす」と共用である。「かくす」「かぶせる」など、交替可能な類義語もある。「カバー」の存在も無視できない。

「おおう」が現代語の中で、さほど目立たない存在であること、「～で～をおおう」の形式が多く、辞書の例文が「似たりよったり」であることも、冷静に見れば（同情はするものの）当然の帰結である。

【参考文献】

風間喜代三ほか 1993『言語学』 東京大学出版会
須賀一好 1987「動詞の自・他の対応」『ケーススタディ日本文法』 おうふう
鈴木英夫 1988「「ヲ＋自動詞」の消長について」『国語と国文学』第62巻第5号 至文堂